

量)であり、労働条件は厳しかったのである。

復員(帰国)

昭和二十五年四月二十日、ナホトカ港より貨物船信濃丸に乗船、ナホトカ港を午後四時ごろ出港、二十二日懐かしい故国の島々が見えたとき、ただ涙が出るばかりであった。私はシベリアで帰国二か月前より栄養失調により入院していたので、舞鶴上陸後も国立舞鶴病院に入院し、数日してから国立松江病院に転院加療し、昭和二十七年十月に退院、郷里に帰ったのは実に八年ぶり、二十八歳のときであり、二十代の青春を酷寒のシベリアで、苦難の道を歩んだのである。

また帰国途中、船内での日本からのラジオ放送によると、ソ連当局は今回の送還でソ連からの送還を終了すると、モスクワ放送が伝えていると放送していた。送還の再開は昭和二十七年ころから始まり、三十一年ころに終わったようである。もし私が第一次の最終船で帰国できなかったら、おそらくシベリアの土と化し、現在のような平和で発展した国を見ることができなかったと思うと、あの酷寒の地で凍土に骨を埋めた六万三千余人の同

胞に対して黙禱をせずにはいられない日々である。

帰国後四十年も過ぎた今日、いまだに年に一、二回シベリア抑留中の夢を見るのである。いかに五か年間のシベリア抑留生活がつかかったかを物語る。ダモイ(帰国)の言葉を信じ、抵抗もなく連行されて以来、苦しみ、諦め、そしてなお生きようとした悲しいまでの人間の姿、望郷の念に支えられて生き抜いた困苦欠乏の日々を私は終生忘れないであらう。

私の戦後

栃木県 小野寺 進

シベリアへ

私は九站で終戦を迎え、吉林にて武装解除され、哈爾濱、満州里經由で九月十九日ついにシベリアに入る。何日かして最初に着いた所が海が見え、日本海が見えたと思ったら何とバイカル湖だと聞いてまたびっくりである。一時間くらい停車し飯盒炊飯をし、そこにはすでに

炊飯の跡があり、先発隊が行なっていることもわかった。それから列車はまた走り、イルクーツク、クラスノヤルスクを過ぎてボンビルスクから南支線に入り、バルナウルという大きな都市に到着した。ここで列車から降り、オビ河の見える丘の収容所に入る。オビ河には大きな船が両側に水車をつけてゆったりと航行しているのが印象的であった。

収容所生活

オビ河からすこし離れた所にラーゲルが三棟列んで建てられ、周りは外部が見えないよう高く板塀で囲まれて、四隅には楼が建ち、そこには歩哨が二十四時間監視しているのである。これから何年ラーゲルで生活するか不安の毎日が始まる。ラーゲルに到着してから数日すると、ロシア人の将校が来て十数人単位で作業に狩り出され、ある組は山の伐採に、また別の組は炭鉱にと分散して出て行く。残った約三百人は収容所から五百メートルぐらい離れた貨車工場関係の仕事につかされた。私は、高山少尉外十数人で、建築隊として工場付属の作業場で毎日穴掘りやれんが運び、材木運搬と重労働ばかり

させられた。

一日のノルマが終わってラーゲルに帰り、疲れて寝ただけである。冬のある日、私は町の所々にある公衆便所の清掃に連れていかれ、大小便が凍結して使用できないためボールやスコップで碎き、馬そりに積んで郊外に捨てに行く。またあるときは、一日のノルマが終わってラーゲルに帰り寝ていたら八時ごろ非常召集がかかり、五十人で貨車工場の構外に石炭を満載した三十トンの大型貨車が四両到着し、一時間で全部降ろせと言うのでみな一生懸命やったが、後かたづけなどしたら夜中の十二時までかかったことがある。

シベリアの夜は、夏は白夜でいつまでも明るく、冬は逆で朝は七時ごろまで星が見える。そのころ起床がかかり、工場内の食堂に連れて行かれ何回かに分けて順番に雑炊をすすって八時から一日の仕事が始まる。仕事が終わると帰りに薪を拾い、時には馬ぐそもジャガ芋に見え拾ったこともある。

また、忘れることのできないことも一回ある。それは二十一年十月のある日曜日でよい天気の日であった。収

容所全員がコルホーズに連れて行かれ、ジャガ芋掘りである。最初のうちは変わった仕事なので面白がってやったが、午後になると掘っても掘っても芋ばかりで嫌になり、半分は取らずに土をかけ、すると見回りに来たロシア人の監督に見つかり、歩哨に話されて大目玉を食らったこともある。

仕事の割に栄養が足りず、次々と栄養失調者が出るようになり、それから収容する病棟が足りなくて一棟増設された。するとそのころ十一月になって私も栄養失調者となり、作業に行かず病棟に収容された。

この病棟に収容されると所内の軽作業が時々あるだけである。病棟は半分は重病人室、もう半分は栄養失調者その他である。私の入室中に隣の重病人が毎日一人二人と死亡していく。その死人を馬そりに乗せて数キロ離れた郊外に埋葬するのであるが、何んと各収容所から集められていた。その数は数百人くらいあり、一人一人墓標が一本づつ立てられていたのである。これらの帰らなくなった戦友たちは十万人とも言われ、無念のことであろうと思うとともによく生長らえて帰れたと思う。

二か月間の入室でやや身体の具合もよくなり、するとまた私は元の建築隊に戻された。二十二年四月末まで重労働につかされ、五月に入り家外作業でアパート建築作業中、歩哨がダモイだから仕事をやめて集合しろと言われ、まさかと思ったが喜んでラーゲルに帰り、三十分くらいで全員が集合した。

ダモイ

収容所中庭に全員が集合終わるとソ連軍将校に名前を呼ばれた者は別に列べと言われ、次々と名前を呼び出した。何があるのかと思ったたら残れと言うのだ。旧将校全員と一部兵隊を含む約五十人ぐらいと思われる。この人たちはどういう反動分子なのかわからないが、私たちはラーゲルを後に貨車に乗せられ、列車は来るとき見覚えのあるイルクーツクやチタ等次々と通過して行く。何日かしてハバロフスクに長時間停車し、一路ナホトカに向かい列車は走る。ナホトカに着くと各地から集まった日本兵でどの施設も満員で、私たちは海岸の砂浜に天幕を張りやっとおちついた。それから長い毎日が続く。日本から船が迎えに来ないというのである。

その日からシンパがハバロフスク発行の日本新聞を持って毎日思想教育が続く。洗脳されないと帰国できないというのである。みな洗脳されたふりをした。ナホトカで一月くらい待たされ、六月十二日待ちに待った永緑丸に乗船すると夕方ナホトカを後に出航し、十五日舞鶴に上陸し、やっと日本の土を踏むことができた。

復員就職

舞鶴で復員手続きを済ませ、おのおの故郷に帰っていった。私の家では兄二人が満州に行っていたのであるが、昭和十九年二人ともフィピンに渡り終戦になるとアメリカ軍の捕虜だったのですぐ復員したが、私だけ遅れて復員することになった。家に帰ると父がよく生きて帰れたと泣いた。

六月十七日復員し、約半年農業を手伝っていたが、十二月知人の紹介で年末年始の繁忙期で人手不足だから郵便局で働いてみないかと言われ、最初は非常勤として働き、翌年四月常勤職員として採用され、東京鉄道郵便局の職員として三十年間、北に西にと郵便列車に業務し郵便輸送業務に携わったが、昭和五十七年モータリゼー

ションの発展とともに郵便物輸送も列車から自動車輸送に改革され、人員の配置替えがあったのを機会に勸奨退職を受け、三十四年間のポストマン生活を退職し、今日まで無職である。

シベリア、幻のように

岩手県 佐々木 徳 男

私が捕虜としてシベリアの強制労働に服したのはネーブルスカヤ収容所といって、バイカル湖を半周した湖畔の地点にある小都市、ウランウデからさらに西北に五百キロぐらい行った荒涼たる未開の地であった。

ネーブルスカヤという知名は美しい響きを持つが、名前とは裏腹に低いなだらかな山が起伏するだけの、ただただ殺風景な土地であった。

ここまで来るのに、満州の海林を出てからシベリア鉄道で二十三日間、真っ黒い貨物列車に揺られ続け、生かされるか殺されるか、全く不明のまま不安な毎日の明け